

宮城教育大学機関リポジトリ

体育授業におけるサッカー指導の成果と課題 - 2008年から2017年の雑誌『体育科教育』の実践に着目して -

著者	佐藤 亮平, 沼倉 学, 近藤 雄一郎
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	55
ページ	219-225
発行年	2021-01-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00001150/

体育授業におけるサッカー指導の成果と課題

—2008年から2017年の雑誌『体育科教育』の実践に着目して—

* 佐藤 亮平・* 沼倉 学・** 近藤 雄一郎

Results and remaining issues of soccer instruction in physical education classes
—Focusing on the practice of the magazine "Physical Education" from 2008 to 2017—

SATO Ryohei, NUMAKURA Manabu and KONDO Yuichiro

要 旨

2008年から2017年までの雑誌『体育科教育』を対象とし、学校体育におけるサッカー指導の成果と課題について検討した。その結果、「教育内容」には技術や戦術が設定されており、「教材構成」としては「ゲーム」が重視されながらも技術や戦術の学習としてドリルゲームやタスクゲームも行われていた。そのため、現在のサッカー実践は個人技術やグループ戦術の指導が充実していることが明らかとなった。とはいえ、これらの指導実践には個人—グループ戦術の上位概念であるチーム戦術やシステムの指導とゲームの複雑性について検討する余地があると考えられた。

Key words : サッカー, 技術, 戦術, 体育科教育, ゴール型

1. 緒言

2017年に改訂された『学習指導要領』では、「ねらい」と「内容」といった授業づくりや単元構成に影響を与える部分だけではなく、授業そのものの在り方について言及された。それは総説の改訂方針の「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」に記載されている（文部科学省、2017）。ここで示された授業改善は、教師が学習者に知識や技能を伝達する授業から、学習者が自ら知識や技能を用いて問題を解決していく授業の方法的転換を促していると思われる。こうした授業方法の変更を促す背景には「子どもたちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取り組みを活

性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点」ということが含まれている（文部科学省、2017）。このような優れた教育実践の持つ視点を導入することは、学校で学ぶ中身が人生や社会の在り方と結びつくこと、その学びが子どもにとって重要視されることにある。学校で行われている授業には、文化の伝達機能があると主張されている¹⁾。それゆえ、学校で学ぶもの＝教育内容²⁾は、その子の人生や社会の捉え方に影響を与えるものとして把握される。この点から見れば、授業の方法論を転換する以前に、そこで学ぶ中身がどういったものなのか、ということについて検討する必要があるように思われる。つまり、学習者が「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、各教科や単元でどのような知識や技能を身につける必要があるのか、ということをも十分に吟味する必要がある。

体育の球技領域における「内容」についてみると、

* 宮城教育大学保健体育講座

** 福井大学

2017年に改訂された『学習指導要領』のゴール型の記載内容に2008年の改訂と大きな変化は見られない。そもそも、2008年の『学習指導要領』の改訂から球技領域は各スポーツによる構成からスポーツ種目の分類論に依拠した〇〇型と記述されるようになった。分類論を取り入れた背景には高橋(2010)によると、「国際的趨勢に歩調を合わせた」ことを示している。こうした改訂を受け、球技は従来の技術を主体とした学習から、種目を横断する戦術を主体とした学習へと変更された。

とはいえ、分類論の理論的支柱は、様々な種目に存在する「共通性」に置かれている。ここで強調しておきたいことは、スポーツを指導対象とする体育において「共通性」が、どのような意味を有するのかということである。しばしば、こうした意味を問うときには高橋(1997)が言うように目的・目標論が多元化する理由である「体育の文化的基盤をどのようなコンファクターで理解するかという相違」を考慮しなければならない。それゆえ、本研究が示している「体育の文化的基盤」を共通性に置くことが、球技の学習として妥当なのかという問題は立場や考え方によって、異なる解釈を生むだろう。しかし、戦後から主張されてきたように体育では運動文化の科学を学習するという教科観の立場からみれば、共通性を軸にした理論には以下の2点に課題があると思われる。

ひとつは、そもそも共通性を柱にするといっても、それは各スポーツ種目を形態的に分析しているにとどまっており、それぞれの種目における価値体系を十分に吟味していない。そのため、記載されている「内容」が、何をもって種目の共通性であるのかという点に曖昧さが残っている。

もう一つは、例え共通性の原理によって学習する内容が抽出されたとしても、その中身が運動・スポーツ文化における意味を問うことができない仕組みとなっていることである。各スポーツ種目の価値体系を明らかにしないまま抽象的な内容を指導することは、観察者やプレーヤーが何を認識しているかが曖昧となるだけでなく、身に付けたことが、その種目においてどのような意味を持つかが判然としないことと関わっている。つまり、身に付けたことがどういったものであるのかということに十分に応えるだけの拠り所がないままとなっている。

このような状況にあるにもかかわらず、現在の球技領域における教材研究は戦術を「内容」に据え、研究が進められている。この点からみれば、戦術を学習の内容として設定することの有用性を評価することができる。しかし、こうした有用性を戦術学習に関わる実践を整理する研究は行われておらず、現在の球技指導における成果と課題が明確になっていない。言い換えれば、2008年の『学習指導要領』の改訂から2017年改訂までに行われた球技の成果と課題について、十分にまとめられていないため、この点に研究の余地があるといえる。

そこで、本研究では球技のゴール型の指導実践を対象に2008年から2017年までに行われた実践についての資料を検討し、その成果と課題を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究ではゴール型の中でもサッカーを対象とした実践に焦点を絞って検討する。その理由は、深田(2017a, 2017b)が報告しているように『学習指導要領解説』の例示に示されている「内容」の指導に現場の教員が悩みを抱えていることにある。このようにゴール型でもサッカーを題材とするからこそ起こり得る指導の難しさを明らかにすることは教育現場の抱える悩みと関係しており、その悩みを解決する糸口を掴むために成果と課題について明らかにすることを試みてみたい。

2. 研究方法

本研究が対象とする資料は1953年から現在に至るまで刊行され続けている雑誌『体育科教育』に掲載されているサッカーの実践に関する報告を検討対象とした。雑誌『体育科教育』を検討対象とする理由は、「多くの体育の研究者や実践者に影響を与えていると考えられること、体育における指導理論や指導実践が報告されていること、現職の教員による創造的な実践が報告されている」(佐藤・近藤、2014)ことによる。つまり、この雑誌が持つ研究者と実践者をつなぐという影響力を見落とすことはできず、体育の世界において雑誌『体育科教育』がもたらす影響力を考慮し、本研究の対象文献として設定した。検討対象期間は、2008年から2017年までとし、その中にあるサッカー実践を抽出し、各報告の「教育内容」と「教材³⁾構成」につい

て検討を行うことで、当該期間に報告されたサッカーの指導実践に関する成果と課題について考察する。

3. 結果

2008年から2017年までに『体育科教育』に掲載されたサッカー実践を以下に示す(表1)。

3-1. 「教育内容」の傾向

2008年から2017年までに雑誌『体育科教育』に掲載されていたサッカーの実践は27本あった。その中で技術に関する「教育内容」を指導している実践は、直接的な記載がみられなかった3本と戦術的な「教育内容」のみを記載している1本を除き、23本の報告があった。具体的な教育内容はサッカーのフィールドプレイヤーが主に用いるキックやドリブルといったボールを操作

表1 雑誌『体育科教育』におけるサッカーの指導に関する記事

No	対象	著者	内容	教材
1	中学校	柴田一浩	キック、トラップ、ドリブル	記載なし
2	中学校	高橋健夫、 末永祐介、 堀邊英明	ドリルゲーム：ドリブル、シュート タスクゲーム： シュート、パス、キープの判断 サポート、スペース、動き直し	ドリルゲーム→タスクゲーム→ゲーム
3	小学校 5年生	岩田靖、 菅沼太郎	センタリング、有効空間からの シュート、サポート	練習→ゲーム①→反省→ゲーム②→反省→ゲーム③→反省
4	中学校 1年生	高橋健夫、 八城雅彦	ドリブル、ボールコントロール、パス	個人→ゲーム→チーム→ゲーム→リーグ戦
5	小学校 5年生	吉永武史、 馬場智哉	パス、トラップ、サポート	ボール慣れ運動→ドリルゲーム→タスクゲーム→ゲーム
6	中学校 3年生	高橋健夫、 高田俊也、 三浦清司	サポート	準備運動→タスクゲーム
7	中学校 2年生	高橋健夫、 藤野博文	パス、ドリブル、トラップ、シュート	スキルウォームアップ→タスクゲーム(3対2→4対4)→メインゲーム(4対4→7対7)
8	小学校	椎名望	記載なし	フットホッケーの提案
9	小学生	酒本絵梨子、 堀美歌	低学年：キープ、中学年：キック、 高学年：サポート	ゲーム
10	小学校 5年生	加納岳拓、 岡野昇	記載なし	ゲームⅠ：手をつないで赤がボールを触る ゲームⅡ：赤が出場し、白が指示 ゲームⅢ：白が出場し、赤は観察
11	小学校 低学年	榊原潔	ドリブル	ドリブルゲーム(4対2のコーン倒し)
12	小学校 6年生	日野英之	スペースへの動き出し	ゴールの方向制限なしの3対3
13	小学校 全体	佐々敬政	ズレを作って突く	攻守分離型→過渡的攻防相乱型→攻防相乱型へと進行
14	小学校 5年生	片峯孝一郎	空いている味方へのすばやいパス ゴールゾーンに入るタイミング 得点を防ぐ動き	ドリルゲーム：①パス & トラップ②狙ってシュート、 ③パス & シュートトラップゲーム ゲーム： 3対3(ルール上、攻撃時には3対1の数的優位)
15	小学校 全体	林俊雄	ボールタッチ、ルックアップ、キープ コンビネーション、時空間認識	低学年： カラーコーン通り抜けサッカー(卵わりサッカー) 低～高学年：じゃまじゃまサッカー
16	小学校 4年生	菅耕史	ルール、攻撃、守備、チームワーク	14対14(お祭りフットボール)→リーグ戦 チーム練習：ミニゲーム
17	小学校 4年生	小島大樹	ボールを前に運んでシュート フリーゾーンを有効に使う チームの作戦を意識してゲームしよう	ゲーム→振り返り→ゲーム
18	中学校 3年生	横井和浩、 北垣内博、 岩田靖	記載なし	スライドボール・サッカー(ゲーム教材)
19	高校	足立匠	アイコンタクト 防御者から離れた位置に移動 前方の空いたスペースに移動する	ボール無しゲーム→メインゲーム (3人→4人→5人の順)
20	高校	清水勝政	クッションコントロール、エッジコントロール、インサイドキック、インステップキック、インフロントキック、シザース、マルセイユターン、ダブルタッチ、スルーパス、壁パス、クロスオーバー、スクリーン GK：キャッチ、ローリング、シュートストッププレ、イクアウェイ、ゴールキック、DFとの連携	1 VS 1 の→2 VS 1 →4 VS 2 →6 VS 2 →2 VS 2 →2 VS 2 + ワイド →4 VS 4
21	小学校 複式	黒原貴仁	壁に様々なボールを蹴る ボールキープやジグザグドリブル パスを使った連携 空間への動き出し	メインゲームⅠ→ドリルゲーム→作戦タイム→メインゲームⅡ
22	不明	三輪佳見	キック、トラップ	カスタネットを足につける
23	不明	三輪佳見	リフティング、インステップやアウトサイドでドリブル	風船→ネット入りボール→卓球ボールの受けとめ

24	小学校 4年生	小松元樹	蹴り方を知り、空いている味方にパス 味方の先にパス 味方がボールを持ったらボールより先に走る コートの広さを考え、攻撃する スペースを見つけて走りこむ サイドを使って攻撃をする 立てた作戦を使って得点を狙う	ドリルゲーム：ドリパスゲーム、パスパスシュートゲーム、ゲートを通 せ！多数ゴールゲーム メインゲーム：フリーシュートのサッカーゲームのコート
25	小学校 低学年	須甲理生	ボールを思いっきり蹴る ねらったところに蹴る 転がるボールのコースに入る ボールを止める	ボールける・とめるランド(2・3時) 2人組対面パスゲーム→2対2ぬきっこ・とめっこゲーム(4-6時)
26	小学校 低学年	森本淳 日野克博	ボールの操作	おじゃまむし突破キック 2対2
27	小学校 6年生	續木智彦 林健司	男子：マンツーマン DF、 コートバランス 女子：横パス、バックパス	ゲーム

*対象について明確に記載されていなかったものは不明と表記した

する技術を位置づけている報告が23本あり、その中でも清水(2014)だけがフィールドプレイヤーとゴールキーパーの両方の技術を位置づけていた。さらに、23本あったボール操作に関わる技術の教育内容は、その技術のみを指導対象としているわけではなく、戦術と結びつけた指導が意図されている。他方、三輪(2015a、2015b)は運動学視点からサッカーの技術指導へ言及する記事となっており、他のものと趣が異なるが、学習者がキックやトラップ、ドリブルといった運動を習得していく過程において必要となる技術について分析している。

次に、戦術を「教育内容」としている実践についてみると19本あった。その中でも、ボールを持っていないプレイヤーへの動きに関する指導として「サポート」や「空間への動き出し」といった報告が11本あり(岩田・菅沼2008；吉永・馬場2009；高橋・高田・三浦2009；酒本・堀2011；日野2014；佐々2014；片峯2014；小島2014；足立2014；黒原2015；小松2015)、ボールを保持しているプレイヤーには19本の報告に記載がみられた。さらに、守備に関する戦術の指導を試みている実践報告もみられた(續木・林2017、菅2014)。

このように、「内容」にはキックやトラップ、ドリブルといった技術的な中身と、ボールを持たない人の攻撃時のサポート行動、攻撃や守備に関する動きといった戦術的な中身が位置づけられており、サッカー指導には、技術と戦術の両方の要素が入っていることが示唆された。

3-2. 「教材構成」の傾向

「教材構成」については、26本の実践があった。26本の中では、すべてに共通する事項として「ゲーム」が位置づけられていた。また、「教材構成」について

は、ドリルゲーム、タスクゲーム、メインゲームといった「戦術学習」論によって提起されてきた構成を用いる報告(高橋・末永・堀邊2008；吉永・馬場2009；高橋・高田・三浦2009；高橋・藤野2010；片峯2014；足立2014；黒原2015；小松2015)や、ゲーム、反省、ゲームといったゲームを軸にした構成がみられる。他にも、「お祭りフットボール」という教材を実施した後に、リーグ戦を行うといったようにフットボールの持つ祭事性に着目した教材の工夫みられる(菅2014)。加えて、ゲームという教材については数的同数の試合というわけではなく、攻撃に有利な状況を意図的に作り出す設定も見受けられる(高橋・藤野2010；榊原2014；片峯2014)。また、先にも述べたように三輪(2015a、b)の報告は技術指導に特化したものであるため、教材にも「足にカスタネットをつける」ことやボールを風船にするなど、技術習得に対する教具を工夫した実践がみられる。

このように、「教材構成」に関しては第1に「ゲーム」が重視され、その中で学習者がサッカーの技術や戦術を発揮することが主眼に置かれていることが示唆される。ただし「ゲーム」だけを行うのではなく、技術あるいは戦術といった内容を担った教材も併せて学習する構成となっている報告もあり、技術や戦術の練習を実施した後にゲームを行うという教材の順序がサッカー指導において有効な構成であることが窺える。

4. 考察

このように2008年から2017年にかけて、サッカー指導に関する実践報告を概観してきたが、その中では次のような指導方法が多く見られた。

まず、「教育内容」についてはキックやドリブル、

トラップといった技術的な中身、ボールを持たない人の動きや攻撃や守備の局面においてどのように行動するかといった個人戦術やグループ戦術の認識や習得に関わる戦術的な中身が設定されていた。

次に「教材構成」については、記載事項がなかった1本を除いた全ての実践の中に「ゲーム」が位置づけられており、その重要性が示唆された。また、こうした「ゲーム」の重要性はありながらも、ドリルゲームやタスクゲームといった技術的あるいは戦術的な「教育内容」を認識・習得するための教材を実施している報告もあり、練習とゲームといった両方が教材を構成することが重要な視点であると考えられる。

これらを整理すると、本研究が対象とした雑誌『体育科教育』におけるサッカー指導では、「教育内容」には、キックやドリブルといった「ボールを操作」する個人技術の認識・習得、2人や3人で行うグループ戦術を設定し、その認識と習得が位置づけられていた。「教材構成」としては「ゲーム」という教材が重視されながらも、「教育内容」で設定した個別技術やグループ戦術といった中身を練習する教材によって構成されていることが確認できた。そのため、詳しくは後に述べるが、戦術の階層における個人—グループ戦術の指導については2008年から2017年までの期間において行われた体育授業におけるサッカー指導の成果といえるだろう。

とはいえ、ここで把握された実践からは、次の点に課題があるように思われる。1つは、戦術の階層における個人—グループ戦術といった部分が指導対象とされ、戦術論における上位概念が指導されていないという点にある。先にみたように「内容」には、技術と戦術が設定されていることが読み取れるが、シュテーターやデブラーによって指摘されているように戦術には階層性が存在している⁴⁾。つまり、チームとしてどのように動くのか、ということが内容化できていない点に課題が残されている。特に球技に分類されている競技がチームスポーツと呼ばれていることを考えれば、チームとして試合に臨むことの面白さや楽しさを学習者に伝達することが必要であるように思われる。

もう一つは、教材において実施している、「ゲーム」という教材がもつ特性をどのように考えるかということである。本研究は、「ゲーム」という教材が持つ不確実性について再考することを提案してみたい。先に

みてきたようにサッカー指導では個人やグループ戦術を内容として設定している。これは言い換えれば少人数で行うものから大人数で行うものへ、というように線形的な系統性が狙われていた。こうした、線形的な積み上げは宗野(2015)によれば、「戦術学習」論が提起されて以降も、同様の傾向にあるとされる。また、学習した内容が実践しやすいようにルールや人数を考慮したゲームが行われている。他にも、単元の進行につれてゲームの形式も変化させ、学習内容が反映しやすいように考慮されている。しかし、近年、サッカーではゲームを複雑系として捉えようとしている。こうした変化はサッカーのゲームに複雑さがあることを説明するだけではなく、ゲームの形態が変化する意味にも影響を与える。「教育内容」や「教材構成」の系統性を担保するために行うゲームの形態の変更、すなわち、ルールなどの設定の変更が、プレーの現れに影響を与えるということである。こうしたゲームが持つ特性から考えていけば、ゲームの形態を学習の進展とともに変化させていく方法は、学習者にとって困難な状況を生み出す可能性がある。従来であれば前時に実施した2対2のゲームに対して学習者が感じていた感覚やイメージが本時に行う3対3や4対4に引き継がれながら技術や戦術の質的な発展が意図されていたが、複雑系の考え方でゲームをみたときには、実施するゲームのルールや人数が異なると学習者が本来引き継ぐはずだった技術や戦術の学習課題が現れないという事態を招く可能性が浮上する。本研究では、こうした問題に対し、ルールやプレーに対する制限をきつくする方向で解決策を見出すよりも、その学習過程において単元のはじめに行うゲームと終わりに行うゲームの形態を最初から変えないという手法の評価が見直される必要があると考える。

5. まとめと課題

本研究では2008年から2017年までの雑誌『体育科教育』を対象に、学校体育におけるサッカー指導について概観してきた。その結果、「内容」には技術や戦術が設定されており、「教材」には「ゲーム」といったものが重視されていることが把握された。そして、現在のサッカー実践は個人技術やグループ戦術の指導が充実していることが明らかとなった。とはいえ、これら

の指導実践には個人―グループ戦術の上位概念であるチーム戦術やシステムの指導といった点に課題が残されていることが考えられた。また、単元の進行に応じて「ゲーム」の形態を変化させるといった教材構成には、ゲームそのものがもつ複雑性にどのように対応するかについて課題があると考えられた。

今後の課題は2点ある。ひとつは球技のゴール型における指導方法の成果と課題について検討することである。本研究では、球技のゴール型の中でもサッカーに限定した指導実践について検討した。そのため、バスケットボールやハンドボールといった他の種目の実践について触れることができていない。したがって、ゴール型全体の課題という事について分析することができなかった。ここに課題が残されている。もう一つは教育内容の拠り所となるサッカーの技術・戦術の体系について検討することである。本研究では実践の課題としてチーム戦術やシステムの指導を挙げた。それらを教育内容とするためには、技術や戦術の体系について提起する必要がある。そのため、今後、技術や戦術を分析する視点および方法について検討し、サッカーの技術・戦術体系を提起することが今後の課題といえる。

注記

- 1) 授業が持つ機能について田中(2007)は「ある文化内容を示して、子どもたちがそれを獲得する営み」という。他にも中村(1971)は体育を「『運動文化の継承・発展に関する科学を教える』」教科であるといった主張がみられる。
- 2) 本研究が用いる「教育内容」とは「現代科学の一般的・基本的概念や法則の中から、授業過程の中で、すべての生徒に教えることが可能であるという検証を経たもの」という高村(1987)の教授学理論を基に、実践報告の中で記述されている文書の中から学習者が認識・習得するものとして読み取ることができるものを対象とした。
- 3) 本研究が用いる「教材」とは「教育内容をなう実体として、子どもの認識活動の直接的な対象であり、科学的概念や法則の確実な習得を保障するために必要な材料(事実、資料、教具)」という高村(1976)の規定に則り、実践報告において用いられている練習の構成を対象とした。
- 4) シュテューラーの用語の定義によれば戦術の階層性は「戦法>戦略>作戦>戦術」となっていることが理解できる。それに加えて、デーブラー(1985)は戦術にはさらに階層性があることが示し、「戦術」には、「システム>チーム戦術>グループ戦術>「個人戦術」という階層があることを示している。本研究においても戦術という用語には、シュテューラーによる用語の定義とデーブラー(1985)が示した階層が存在するものとして把握する。

文献

- 足立匠(2014) サポートを学ぶ「ボール無ゲーム」を準備運動に位置づけたゴール型の授業. 体育科教育, 62(10): 37-41.
- 深田忠徳(2017a) 体育授業における戦術学習に関する一考察(1): サッカーに着目して. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 36(1): 43-52.
- 深田忠徳(2017b) 体育授業における戦術学習に関する一考察(2): サッカーを専門とする教員への意識調査から. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集 36(2): 85-94.
- G. シュテューラー: 谷釜了正・稲垣安二訳(1980) 球技戦術論(1). 新体育 50(6): 492-501.
- 日野英之(2014) ゴール型のスペース学修を促す「ドッチモゴール」とその教具. 体育科教育, 62(4): 34-37.
- H. デーブラー: 谷釜了正訳(1985) 『球技戦術論』不昧堂出版.
- 林俊雄(2014) サッカーの教材史を辿る. 体育科教育, 62(10): 14-18.
- 岩田靖・菅沼太郎(2008) もっと楽しいボール運動②「センタリング・サッカー」の教材づくり. 体育科教育, 56(13): 58-63.
- 片峯孝一郎(2014) ボールキープからの状況判断力を身につける教材「フットビー」. 体育科教育, 62(5): 52-56.
- 加納岳拓・岡野昇(2011) 「学び」を深めるペアサッカーの実践. 体育科教育, 59(11): 42-46.
- 小島大樹(2014) シュートの有効空間を拡大する. 体育科教育, 62(10): 28-31.
- 小松元樹(2015) 全員シュートを目指すフリーシュートサッカーゲーム. 体育科教育, 63(6): 52-56.
- 黒原貴仁(2015) 複式学級におけるゴール型ゲームの授業づくり. 体育科教育, 63(2): 36-39.
- 三輪佳見(2015a) カスタネットでボールと出会う感じをつかむ. 体育科教育, 63(4): 74-77.
- 三輪佳見(2015b) ボールリフティングは何の基本. 体育科教育, 63(5): 63-67.
- 文部科学省(2017) 学習指導要領. 東山書房.
- 森本淳・日野克博(2017) 『レジボール』で豊富なボール操作の経験を. 体育科教育, 65(2): 43-47.
- 中村敏雄(1971) 学校体育は何を教える教科であるか-高校の体育指導を考える. 体育科教育, 19(8): 53-56.
- 酒本絵梨子・堀美歌(2011) ゴール型ゲームにおける「攻防」の楽しさを学ぶ実践. 体育科教育, 59(6): 42-46.
- 榊原潔(2014) 足でボールを操作する技能を高めるドリブルゲーム. 体育科教育, 62(2): 26-29.
- 佐々敬政(2014) 小学校6年間を見通したゴール型ゲームの教材. 体育科教育, 62(5): 34-37.
- 柴田一浩(2008) 中村先生のサッカーの授業. 体育科教育, 56(5): 64-65.
- 椎名望(2011) ゴール型ゲームの教具づくりと「フットホッケー」の実践. 体育科教育, 59(3): 38-40.
- 清水勝政(2014) 高校段階で「サポート」と「状況判断」をどのように学ばせるか. 体育科教育, 62(11): 44-47.
- 菅耕史(2014) みんなが楽しめるフットボールをめざす「お祭りフットボール」. 体育科教育, 62(10): 24-27.

- 須甲理生 (2017) 「蹴る一止める」動きを低学年で. 体育科教育、65 (2) : 34-37。
- 宗野文俊 (2015) 学校体育におけるボールゲームの指導理論に関する研究－フラグフットボールを中心にして－. 北海道大学大学院教育学院、博士論文。
- 高橋健夫、高橋健夫・立木正・岡出美則・鈴木聡編 (2010) 新しいボールゲームの授業づくり－学習内容の確かな習得を保証し、もっと楽しいボールゲームの授業を実現するために－. 体育科教育別冊 : 151-152。
- 高橋健夫・藤野博文 (2010) すぐれたゲームパフォーマンスは on the ball + off the ball の学習から. 体育科教育、58 (6) : 74-75。
- 高橋健夫 (1997) 第2章体育科の目的・目標論. 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編体育科教育学の探求－体育授業づくりの基礎理論. 大修館書店、pp. 17-40。
- 高橋健夫・高田俊也・三浦清司 (2009) off the ball の動きをみにつけて Qualitative Soccer を楽しもう. 体育科教育、57 (11) : 73。
- 高橋健夫・末永祐介・堀邊英明 (2008) ドリルゲームとタスクゲームで楽しくゲームパフォーマンスを高めよう. 体育科教育、56 (6) : 76-77。
- 高橋健夫・八城雅彦 (2008) 女子生徒が熱狂するフットサル－中学校1年生－. 体育科教育、56 (13) : 70-71。
- 高村泰雄 (1987) 物理教授法の研究－授業書方式による学習指導法の改善－. 北海道大学図書刊行会。
- 高村泰雄 (1976) 教授過程の基礎理論. 斎藤浩志・鈴木秀一編、講座日本の教育6 教育の過程と方法. 新日本出版社。
- 續木智彦・林健司 (2017) 男女の能力差にどう向き合うか－子どもたちとともに創るサッカー学習を通して. 体育科教育、65 (2) : 48-51。
- 田中耕二 (2007) 1 授業という世界. 田中耕二編、『よくわかる授業論』. ミネルバ書房。
- 吉永武史・馬場智哉 (2009) サポートを学習による小学校5年生のサッカーの授業実践とその成果. 体育科教育、57 (11) : 17-19。
- 吉野聡・斎藤拓真・宇井俊 (2014) ゴール型ゲーム中にボールを受けられないのはなぜか. 体育科教育、62 (2) : 18-21。
- 横井和浩・北垣内博・岩田靖 (2014) 戦術学習を保障する「スライドボール・サッカー」. 体育科教育、62 (10) : 32-36。

(令和2年9月30日受理)

